

男長ひとケゴト

齊
藤

26

は葉の結婚式が行われた
おち落 鉄に乗った。私も曾
ぬれ 濡て二十年ほど前に、地下鉄で通勤してい
たこともあるが、その後ほとんど利用する機会もなく、迷路のよう複雑化した乗りかえ駅の変貌には、驚いた。乗
き戸惑いつばかりであつた。際限なく膨張する大都會東京の実態を見る思いがした。

当人は内緒話のつもりらし
いが、結構声が大きかつたから周囲の人達の中にも、彼女に目を向けたり、聞き耳をたてる者もいたようだ。

「いえ、それがね、うちの旦那は、健康のためだとか何とかいつて、馬鹿の一つ覚えのように廊下のふき掃除だけはよくやるけど、他は全く駄目なのよ。」

相手は、手を顔の前で振りながら答える。

「それでもやつてくれるだけいいわよ。私のところとき

彼女達の旦那さんは、いざ
れも定年退職をした身で、ど
うもいま流行の「粗大ゴミ」
と称される部類に属するらし
い。尤も、最近では、粗大
ゴミではなく「濡落葉」とい
うんだそうである。粗大ゴミ
は、邪魔だなれど何とか処分
できるが、濡れた落葉は、地
面にひつついで掃くにも掃け
ず、燃やすにも燃えず全く始
末に悪いところから、始末に
負えない厄介者を指して使う

とはいっていられないのである。社会の第一線を退けば、休む間もなく次は、老いとの戦いが待っているのである。しかも、この戦いは核家族化によつて、子供達の手を借りることは得ず、老いた者同志で立ち向かわなければならぬ。い。

「こつちだつて、一緒に歳を取つていくんんだから。」と語る彼女には、これから始まる老いとの戦場が、見えているのかもしれない。旦那さんは、果たしてそれに気づかな

草との戦いだ。途中苦しい時
もあつたが、これで手を引け
ば雑草に負けちまう。もし、
ここで死ねば、百姓として本
望だと思つた。」凄じればか
りの、生きることへの証じであ
る。生ある者は、老いと死か
ら逃れることはできない。
れど、生きることへの執念さ
くを持ってば、老いの恐怖から
救われることはできる。

る。二人の会話を聞くとはなしに聞いていると、どうも買いたい物先で偶然に出会つた旧知の間柄らしい。一くさり買物談義をしたあと一人の婦人が、相手にこうきいた。「ところでき、あんたのところの旦那さんは忠実だから、何でもよく手伝ってくれるでしょ。」

ほとほと困つていよいよ、声を落として嘆くのである。しかし、彼女の表情には、いうほど困つている様子もなく、むしろ逞しさがのぞいていた。一瞬、周囲の人達の目が、笑つたようであつた。私も思わず苦笑いが込み上げてきたが、必至に堪え

いま定年退職という満期除隊となつて、傷ついた身を、コントクリートジャングルの中でじつと癒して、いに違ひあるまい。彼等が哀れであり、気の毒でもあるが、明日はわが身と思えば、心が寒くなる。しかし、現代は誰もが長生きをする長寿社会であります、「人生五十年」などと恰好のよいこ

生きることへの執念

たら、自分は横のものを縦にたてにもしないくせに、私に指図ば
かりして威張つながさまつているのよ。
いつまでも何様の氣でいるの
か。こつちだつて一緒に齢を
とうていくんだから、たまつ
たもんじやないわよ。」

流行語だと、
言い得て妙ではあるが、そ
んなちやかしには腹がたつて
仕方がない。二人の旦那さん
も、きっと会社という配属部
隊で、死にもの狂いで企業戦
争という厳しい戦いを続け、

いのか、あるいは、知つても今更戦いはご免とばかりに、背を向けているのである。うか。考えてみれば、戦いに傷ついているのは、何も男性だけではなく、女性とて同じように傷ついているのであ